



# 丸小だより

～ 実践目標 自分が輝く、みんなも輝く ～

平成 30 年 1 月 31 日 (水) No. 10  
横浜市立丸山台小学校長 新井 篤志

## 世の中を、生き方をみつめる

校長 新井 篤志

1月22日(月)は、あっという間に積雪が10cmを越える大雪となりました。その後、低温注意報が発令されるなど今年の冬はかなり寒さが厳しいようです。それに呼応するかのようにインフルエンザも流行し、推定患者数が過去最大といわれ、まだまだ油断ができない状況にあります。寒さ対策と合わせて、「手洗い・うがい」「十分な休養や睡眠」「しっかりと食事をとる」など日頃の規則正しい生活を心掛けることが大切といえます。

さて、今年には明治維新後150年にあたります。日本は欧米の国々に追いつこうと様々な取組を行いました。今の学校のはじまりとなる学制もその一つです。教育を通して人材を育成することが国力を高めることにつながるのと考えるもと取り組まれました。しかし、教育は明治になってから行われはじめたというよりは、それ以前から日本では大切にしていました。例えば、世界遺産になった富岡製糸場の建設をみると、技術者はヨーロッパから呼び寄せたが、当時の政府関係者は技術を外国から学んでも実際に建てるのは日本人の手で行うという信念を持っていました。レンガを焼いたり製糸場を建てたりは当時の日本人によってなされたものです。驚くことに1年もかからずに富岡製糸場をつくりあげました。学校ができる前の時代にもかかわらず、当時の人々は高い技術をもち、組織的に活動していたことが想像できます。

こうした事業が行えたのは、武士の教育に当たる藩校や庶民を対象にした寺子屋などが機能しており、そこで行われた教育が脈々と当時の人々の中に浸透していたと言えるのではないのでしょうか。会津藩日新館では人材育成を柱として文武両道、天文学、医術などを教え、全国でも有数の教育機関だったと言われます。また、入学前の子どもには「什の掟」で人づくりの原点を示しています。7か条からなり「うそを言うことはなりません」「卑怯なふるまいをしてはなりません」「弱い者をいじめてはなりません」そして最後に「ならぬことはならぬものです」と締めくくっています。これらは、今の教育に置き換えても示唆を与えてくれます。学問や技術の習得は重要ではあるが、それと同時に人としてどのように生きていくのがよいのかを問いかけている教育がすでに江戸時代に行われていたことがわかります。

最近、吉野源三郎の「君たちはどう生きるか」が幅広い層で注目を集めています。世の中の先が見えにくい時代だからこそ、世の中に目を向けその中で自分がどう進んでいくのかを考える必要があると感じている人が多いのかもしれない。先人の生き方には私たちへのヒントがたくさんありそうです。

